

授業アンケート結果 報告書

平成 30 年度(2018 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

1. はじめに

本学では平成 17 年度より、各教員の授業方法・内容の充実を目指し、実習を含むすべての講義・演習・実習科目について、受講学生に対しアンケート調査を前期・後期に 1 回ずつ実施してきた。平成 22 年度に設問の大幅な見直しを行い、23 年度から集計結果を公開してきた。平成 26 年度に設問を 2 項目追加し、現行の授業アンケートは 15 項目の設問および自由記述から成っている。

授業アンケートの設問は、授業に対する学生自身と教員の取り組み姿勢、授業内容の理解度・達成度および授業の意義という観点から設定されている。その集計結果は、本学の教育理念「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」に相応しい教育が行われているか否かを知る貴重な手掛かりとなる。以下、平成 30 年度(2018 年度)の授業アンケートについて、実施方法と全体および学科単位での集計結果を示す。

2. 授業アンケート実施方法

アンケートの内容と配付・回収：

アンケートの設問は「学生自身の授業の取り組み」に関する 5 問(結果の図中 Q1～Q5)、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する 7 問(Q6～Q12)、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する 2 問(Q13～Q14)、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する 1 問(Q15)である。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 段階または時間や回数などを 4 段階に区切った選択肢から 1 つ選ぶ形式とした。

すべての科目について、前期・後期に 1 回ずつ、原則として授業の最終回に授業アンケートの設問用紙と回答のためのマークシート用紙を配布し、授業時間内に回答させて回収している。アンケートは無記名であり、回答内容が教員に分からないように回収する方法を定め、教員が遵守している。設問用紙裏面には自由記述の欄があり、授業への感想や要望等があれば記入することになっている。

アンケート対象学生数と科目数：

平成 30 年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成 30 年	前期	432	115	30	145	12656	14022
	後期	456	110	35	145	11746	13252

アンケート集計・解析方法とフィードバック：

各学科の学年ごとに、設問に対する 4 段階回答を集計し、学年及び学科単位で回答の割合を図示した。各授業科目については、科目間での比較のために差が顕著に表れるよう 4 段階回答を 8、3、2、0 点として点数化し、また設問項目間での比較のために評価レーダーチャートを作成した。

アンケートの集計・解析結果については、各教員へ担当分の結果を配布するとともに、学科全員分および学科単位での結果を学部長へ配付し、その後学科長が各学科において、アンケート結果をふまえて授業改善につなげられるようにフィードバックを実施している。

なお平成 28 年度より、授業に対する学生の自由記述内容について pdf ファイルによるデータ化を行ない、30 年度は web 上での自由記述を試験的に実施した。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について、各学科での回答割合を図で示した。全学的な総括は、過去の結果との比較および学科間での相違に着目して行なった。

全学的アンケート結果 (図Ⅱ)

各学科のアンケート結果を基に大学全体での傾向をまとめた。「教員の授業に対する取り組み」は概ね高評価であった。「学生の理解度・達成感」では、前年度の高い値からさらに上昇していた。「学生の授業への取り組み」では、改善の傾向は見られたものの、前年度と同様、大部分の学科で予習・復習時間や準備学習がまだ不十分であった。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われているが、学生の自己学習を推進する方策を各学科で検討する必要があると考えられた。

「学生自身の授業の取り組み (Q1～5)」

前期・後期ともに、いずれの学科でも授業を 4 回以上欠席した学生は 10% 以下であった (Q1)。前年度に欠席回数が多かった子ども保育福祉学科においても改善が認められた。予習 (Q2)、復習 (Q3)、準備学習 (Q4) を行なっていた学生は、総じて前年度よりもわずかではあるが増加し、また予習・復習の時間を 1 時間以上と答えた割合も増加していた。しかし未だに約 30% の学生が、また学科により半分近くの学生が、全く授業外に学習していないことが示された。授業外学習の項目は臨床工学科が群を抜いて高い値を示し、学科間での指導の違いが現れていた。一方、授業については全学科において 90% 程度の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、居眠りや私語など無く意欲的に取り組んでいると考えられた (Q5)。平成 31 年度 (2019 年度) より、全学的に授業外学習の方法手段をシラバスへ具体的に明記することとした。これが学習習慣改善の方策のひとつとして機能することが期待される。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み (Q6～12)」

シラバスに沿った授業と目標や習得すべき事項の説明 (Q6, 7)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力 (Q8, 9, 10)、およびわかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか (Q11, 12) について、前期・後期ともに全学科において 90% 以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、大部分の学生は教員の取り組みを認めていると考えられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度 (Q13・14)」「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か (Q15)」

学生の理解度 (Q13)、学習意欲の高まり (14) および授業の意義 (Q15) について、前期・後期ともに全体として約 90% の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えていた。これらは授業に対する教員の熱心な取り組みの成果であると思われる。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】では、3年生以外は3回以下がほとんどであったが、3年生は前期・後期とも80%台である。【予習復習時間】では、昨年度、「1年次ではほとんどしなかったという学生が約60%いる」と報告しているが、今回の結果でその学生(2年次生)が他の学年に比べ予習復習時間が少なく、シラバスに記載されている準備学習も少ないことが明らかになった。また、他学科に比べ、「ほとんどしなかった・30分未満」割合が高く、再度、全教員に1年生のうちから予習復習の学習習慣を身に着けるような指導と2年次学生(現3年次生)に対し再度指導を促していきたい。【授業中の取り組み】を見ると、「Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか」の問いに対して、学年の進級につれて良好になってきている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関する設問では、「あてはまる・ややあてはまる」が、すべての学年および学期において95%以上と高く、学生からは概ね良好な評価であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関する設問では、他学科に比べると「あてはまる・ややあてはまる」が90%弱と割合が低かった。学年の進級につれ良好になってきているものの、2年次前期では1年次より低下している。1年次では高等学校までの授業方法等の違いが考えられる。2年次前期では大学にも慣れ、やや中だるみが生じているのではないかと考えられる。これは、学生自身の授業の取り組みがほかの学年に比べ2年次前期が低いことと関連している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

30年度も授業の意義について95%以上の学生が「あてはまる・ややあてはまる」と回答している。しかし、「あまり当てはまらない」と回答した学生数は2年次前期が多く、昨年度と同じような結果となった。2年間同じような2年次前期の特徴が出ているので、この結果を全学科教員と共有し、指導に当たっていく必要性を感じている。

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は、3年生の4~5回欠席が前期で約10%、後期で約13%と増加し、3回以内の欠席でみると、1、2年では90%以上であるが、3年は90%未満である。このように、3年では中弛みの傾向がみられたが、4年では持ち直している。気にかかる点として、1年前期の欠席0回の学生の割合が、2016年度約74%、2017年度約65%、2018年度約52%と、ここ3年間で徐々に減少していることが挙げられる。【予習復習】は学年が上がるにつれ、「ほとんどしなかった」学生の割合は低下する傾向が見られ、予習では1年前期約52%（昨年約57%）から4年後期約24%（昨年14%）、復習では1年前期約47%（昨年51%）から4年後期約22%（昨年約13%）となっていた。ここでも3年前期中弛みが気になる点である。1年の予習を「ほとんどしなかった」割合は、2016年度約60%、2017年度約57%、2018年度約52%と、ここ3年間で徐々に減少している。【学習への意欲的な取り組み】では80%以上の学生が肯定的に回答し、学年とともに上昇している。

昨年までは、学期中に教育実習や就職活動が行われる4年以外では、3回以内の欠席者はほぼ9割であったが、3年後期が約87%と、欠席回数が多くみられる点が気になる。授業出席への意欲を維持させるために、徐々に専門性が高くなる2年、3年での授業の工夫が必要である。予習復習は、「ほとんどしなかった」学生の割合は学年が上がるにつれて低下傾向にあった。昨年は2年後期中弛みのような状況がみられたが、その学年が3年になったことも関連しているかもしれないが、3年に中弛み傾向が認められた。4年次での資格試験に向けて、意識づけを高める対策が必要である。近年、資格試験に対する意識づけを高める指導を行い、ほとんどの資格試験で全国平均を上回る合格率となっているが、学年進行とともに受験をあきらめる学生が増加している。意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化の傾向が続いている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6~12のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると全学年においてほぼ9割を超える肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。しかし、他の学年に比較して1年の積極的な評価が低い点が気になる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとすべての学年において90%を超える肯定的な回答を得ている。しかし、他の学年に比較して1年の積極的な評価が低い点が気になる。昨年度は改善されていたのだが、大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善を再検討しなければならない。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしており、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。「あてはまる」だけに注目すると約70~93%（昨年72~92%）であり、昨年よりやや低下している。特に、1年は前期約70%・後期81%（昨年は前期80%・後期92%）と大きく低下している。本学科への進学に対する満足度を上げるために、新入生の段階から、今の学びが将来につながっていることを学生に授業を通して理解させながら、学習意欲の向上を図る取り組みの見直しを検討しなければならない。

子ども保育福祉学科アンケート結果（図V）

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】：本学科は募集停止となり、本年度が最終学年であった。6回以上の欠席はなく、在学生全員がそろって卒業できた。【予習復習】および【準備学習】については、約6割から7割の学生が行っていた。【授業に対する取り組み】：前期より後期の方がその取り組み姿勢にやや改善がみられた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると95%を超える肯定的な回答を得ており、在学生全員を卒業させようとした教員の取り組みに対して学生からは良好な評価を得ることができた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q13. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」および「Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。昨年は、「あてはまる」「ややあてはまる」が前期では90%前後であったが、後期では50%前後まで大幅に下がったことから、教員間で共通認識を持ち、最終学年の全員卒業を目指した取り組みを行った。本年度は、ほぼ100%に近い評価であった。教員の取り組みを学生が評価してくれたものであると考えたい。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q15. 授業は意義あるものでしたか。」の質問は、総合的な授業評価を問う最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられる。この質問に対しても昨年は、前期では90%を超えていたが、後期では50%以下まで大幅に低下したが、本年度は、ほぼ100%に近い評価であった。このことについても、教員の取り組みを学生が評価してくれたものであると考えたい。

学科最後の卒業生は、全員卒業、全員就職を達成し、子ども保育福祉学科の幕を閉じた。

作業療法学科アンケート結果 (図VI)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、欠席3回までを含めると90%程度と概ね良好である。高学年になるにつれて欠席は少なくなる。期末に控える臨床実習を意識しだす結果だと考える。2年次(20期生)は最も欠席の傾向が高いが、前年の1年次から続いており、修学意欲の低いクラスである。

予習復習について、予習は全学年をとおして「ほとんどしなかった」との回答が50%を超え、復習は20期生以外は後期に若干改善する。ただし、4年次(18期生)の前期のほとんどが学外臨床実習であるのに復習が少ないのは理解できない。理由のひとつに学外臨床実習がこのアンケートで問われる「授業」の範疇に入らず、学生がケースノート作成などを復習と捉えていない可能性がある。また、18期生が低学年から学習意欲の低いクラスであったことも理由の一つと考えられる。

私語や居眠りについては90%が「あてはまる(していない)」と回答しており、これは教員からの評価とも一致する。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ね90%以上がシラバスどおりの授業進行であると回答している。教員の授業内容説明についても同様である。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年でほぼ100%に近い。教員の授業に対する取り組みも(開始時間も含む)、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で90%を超えている。ただし、全学年を通して居眠りはままた見られるが、そもそも私語は少ない。授業参加への促しについても、教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。なお、ほぼすべての項目で1年次(21期生)の評価が高い。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解、学習意欲について、前期は全ての学年で肯定的意見が80~90%程度だが、後期の1年次だけは全ての項目で肯定的意見がほぼ100%となっている。逆に4年次(18期生)の後期は全ての項目で70%台に落ちている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

傾向は前項と同じである。1~3年時の80~100%程度が肯定的だったのに対して、4年次(18期生)だけは70%程度に落ちている。18期生が学習意欲の低いクラスであったことが原因かもしれないが、程度の差はあれ、同じことが20期生にも当てはまる。学生による授業意義の有無は学生の成績が反映されているに過ぎないかもしれない。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、いずれの学年も欠席3回以内の学生が95%以上と良好な結果を示していた。1年生で前期に比し後期の欠席回数がやや多い点については注意喚起が必要である。

予習時間および復習時間は、30分以上学習する学生の割合が20～70%と学年により差がみられたが、いずれも昨年度に比し増加していた。とくに、3・4年生後期で70%と高い割合を示した点が評価できる。シラバスに記載されている準備学習を行っている学生の割合は60～80%であり、3年生後期で30分以上が40%、1時間以上が40%と高い割合を示していた。

学習に意欲的に取り組んだかに対して、あてはまる、または、ややあてはまると回答した学生の割合は、前期は85～95%であったが後期には90～95%と改善がみられた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスにそった授業、授業目標・修得すべき事項の説明、授業への参加の促し、わかりやすい説明や指導、講義資料の適切性、授業の雰囲気については、いずれの学年も95～100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、教員の授業に対する取り組みが高く評価されていた。

授業の開始時間を守っていたかに対しては、全学年で95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、昨年度に比し大幅な改善が認められた。

初年度である1年次や、国家試験対策が中心となる4年次には、学生の理解度に配慮し、講義資料や指導方法を適宜、見直す必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、および、授業で学習意欲が高まったかに対しては、いずれの学年も90～100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、授業に対する学生自身の理解度・達成度は高いといえる。

あてはまるだけを見ると、昨年度は、1・4年生の前期が60%前後と低い傾向があったが、今年度は全学年で80～90%と改善がみられている。大学の授業形態への導入時期である1年次と、多数の国家試験科目の総復習を中心とした4年次に、学生の理解度に配慮が必要であることが伺える。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、いずれの学年も95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており高く評価できる。あてはまるだけを見ると、昨年度は、1・4年生の前期が60%程度と低い傾向があったが、今年度は全学年で80～95%と改善がみられている。

学生の満足度を高めるためにも、学科教員間で、各学年の授業の内容や方法について議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

視能療法学科アンケート結果(図Ⅷ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】授業への出席率は高い。後期に関しては、毎年、授業欠席に対する単位への影響等を指導していることから、欠席者数は少なくなっている。また、高学年ほど出席率が高い傾向が見られた。おそらく、国家試験や就職等、社会人としての自覚が芽生えた結果であることが考えられた。

【学習への意欲的な取り組み】これも、高学年ほど予習をする人数および予習時間が多くなっていた。

Q2～Q3の自主学習時間(予習復習)については 前期と後期を比較するとわずかではあるが増加している。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～Q12のすべての質問では、1～4年次において「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると90%以上の回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ていた。Q9～Q12については、本学科でも高い傾向にあり学生の満足度は高い。1～2年次の基礎科目でも高い満足が観られた。高等学校までとの授業スタイルの違い、たとえば、パソコンおよびプロジェクターを用いて、板書が少ない、あるいは、理系でもこれまで選択していなかった生物学的科目等に対する戸惑いがあるのではないかと心配したが、大きな問題はなかった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

Q13～Q14のすべての質問における、学生の理解度・学習意欲の高まりについても、3～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。しかし、1年次は前期60%程度であった。その理由として、高等学校までとの授業内容および授業スタイルの違いが考えられた。大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新生生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善に取り組む必要があるだろう。また、授業が判らない場合や、不服、不満等がある場合に学生が気軽に相談や不服申し立てできるような窓口を当科として設ける等の対策を構築していることから、有効に活用してもらいたい。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は、全学年の後期では昨年と同様に90%以上となっていた。一方、1、2年次は前期80%程度であったが後期には90%以上となっており、学科教育が有効に機能していると総括される。

当科においては、1～2年次の基礎科目においても国家試験に準じたカリキュラムを行っている授業もあるが、そうでない授業もある。しかし、国家試験合格のみが、社会に有為な人材の育成という本学の建学の理念における最終目標であるとも限らず、多方面での教養や知識が、本学卒業後にも、役立ちうるといった、広い視野をもって学習すべきとも考える。いずれにせよ、低学年においては、国家試験合格の役には立たないかもしれないが、興味の持てる面白い授業を行うことで、生涯を通じて、学習とは楽しいことであるということを悟って身につけていただければ良いと考える。そのためには、楽しく学習でき、いつでも質問、不満などを気軽に相談できる開かれた自由な雰囲気重要であると考えます。

臨床工学科アンケート結果 (図IX)

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数は、全学年で見ると前期に比して後期が若干増加しているものの大きな差はない。予習の時間に関しては、各学年ともに前期より後期が増加している。1年次においては前期に予習をする学生が非常に少ないが、授業の内容が本格的なもの(専門的)になる後期においては予習していることがわかる。復習についても予習と同様な傾向を示しており、予習・復習をしないと授業についていけないことを理解している。学習時間は前期よりも後期の方が多くなっている。4年次生は予習復習の時間が最も長く、特に後期は国家試験対策に集中していることが分かる。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様の傾向であった。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、後期に増加傾向となった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、全学年ともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測される。教員全体のミーティングでは前期・後期ともに同様の対応を行ってきた。今後、アクティブラーニング等の取組を増加させ、引き続き、学生個々の能力を伸ばす指導を継続させることが重要である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標は習得すべき事項の理解」、「授業での学習意欲の高まり」については、1～3学年についてはともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、今までの学習が十分になされていることが伺える。しかし、4年次後期において学習意欲が低下している学生が僅かだがいる。国家試験対策で少し疲弊している可能性がある。この時期の4年次学生は精神的にも不安定であり十分なフォローをする必要がある。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年ともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、授業は意義あるものであったと推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に望んでいたと言える。今後、授業の中に積極的にアクティブラーニングあるいはWeb学習などを取り入れ、一方向型教育の改善が必要であると感じられた。

薬学科アンケート結果 (図 X)

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席3回以下がほとんどであった。しかし、6年後期では、4・5回及び6回以上の欠席が合わせて50%以上あり、昨年度より多かった。6年生後期の欠席状況は毎年悪くなっているようである。

予習・復習については、ほとんどしなかった学生は概ね30-40%程度であった。予習に関しては、6年後期でも予習をしない学生の割合が増加しているようである。復習については、復習をしない学生の割合は予習をしない学生の割合より若干少なくなったが、例年に比べて予習も復習もしない学生の割合が増えているようである。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%を超えており良好であった。しかし、シラバス記載の準備学習は、20%程度の学生がほとんど行っていないことが明らかとなった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みに関する設問では、すべての設問について「あてはまる」、「ややあてはまる」が90%を超えており、ほとんどの教員が真摯に授業に取り組んでいることが伺えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度については、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価がほぼ90%超であり良好であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ90%超あった。

動物生命薬科学科アンケート結果 (図XI)

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席3回以下がほとんどであった。その中で、4年生の前期において0回の欠席が他学年よりも少なく、約40%見られたが、これは就職活動のためと考えられた。

予習・復習時間は少なく、ほとんどの学年および学期において、「30分未満」、「ほとんどしなかった」を合わせると、概ね50~80%を占めていた。シラバスに記載されている準備学習についても少なく、「ほとんどしなかった」、「30分未満」を合わせると、概ね40~70%を占めていた。しかし、「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、概ね80%を超えており、学習への意欲的な取り組みは、比較的、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に関する取り組みに関する設問では、全ての設問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、全ての学年および学期において概ね80%以上と高く、良好であった。しかし、3年次授業において「あてはまる」の評価は、概ね50~70%程度と他学年次に比べてやや低かった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高まり」の質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、ほとんどの学年および学期において、概ね90%以上であったが、1年次前期のみは概ね80%と他に比べてやや低かった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、ほとんどの学年および学期において概ね90%以上であったが、1年次前期のみは概ね80%と他に比べてやや低かった。

生命医科学科アンケート結果（図 XII）

「学生自身の授業の取り組み」

1～3年生においては授業欠席回数0～3回は、前期・後期ともほぼ95%であった。4年生に関しては卒業研究や国試対策授業の回数が非常に多い関係で欠席が多く見えるが、出席率ではそれほど悪くないと考えられる。予習を1時間以上行った学生は前期・後期を通して、2～4年生は概ね20%かそれ以上であったが、1年生は10パーセント未満であった。予習を30分未満～ほとんどしなかった学生は前期・後期を通して、1年生でおよそ80%、2～3年生でおよそ60%であった。4年生後期は国家試験が迫っているため、予習時間が多い学生が増えたが、ほとんどしていない学生も約40%みられた。復習を1時間以上行った学生は1年生では約15%、2～3年生は約25%、4年生は約40%であり、高学年ほど復習時間が多い学生が多かった。復習を30分未満～ほとんどしなかった学生は1年生前期でおよそ40%もいたが、後期では25%に減少した。2年生～4年生ではおおむね20%前後であった。予習復習の両方において1年生の学習時間が短く、今後指導する必要があると考えられる。シラバスに記載されている準備学習についても、上記予習時間と似たような傾向がみられ、1年生で時間数が短かった。「学習に意欲的に取り組んだか」という設問に対しては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね90%前後であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそった講義かどうか」、「授業の開始時刻は守られていたか」、「授業中の静穏な雰囲気は保たれているか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね90%以上であった。ほとんどの学科教員の講義は高評価であった。「担当教員はわかりやすい説明や指導を行ったか」についての設問でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期通して90%以上であり、概ね学生の満足度は高いことが伺われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」および「授業で学習意欲が高まったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると1年生前期を除き、90%以上であった。1年生前期のみ約80%にとどまったが、このアンケート全般において1年生は冷めた評価をしていること、後期で90%以上になっていることから、特にほかの学年と差があるわけではないと考えられる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「授業は意義あるものだったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね90%以上であった。他の設問と同じように高学年になるにつれて高い評価であった。少数の学生を除いて、大多数の学生は自身の将来の目標を定めたことで、学生自身の理解度・達成度が高くなったことが推察された。